

10月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

長男の嫁が産休を終え職場復帰。いよいよ試練の「孫子守りとの両立」がスタートした。毎週水曜日、金曜日の午後が私の担当であるが、二人の孫は荷が重すぎた。「孫子」の兵法も役に立たず、あえなくギブアップ。今では次男の嫁に来てもらい4人の孫と一緒に見られている。試練に立ち向かい、孫に好かれる爺様を目指したが初戦敗退。

1・テレビ番組から

◆「人生に意味を問うてはいけない。人生の問いかけにどう答えるかが大切だ」〈ボクシング・村田諒太『夜と霧』より〉

5月に行われたWBA世界ミドル級タイトルマッチでは、物議を醸した判定結果により、村田はまさかの敗戦となったが、今回はその雪辱を果たした。チャンピオン戦を前にした村田選手の読書から得た言葉との出会い。トップアスリートは皆読書家である。

◆「変わることを恐れないという意味を持てば、良い方向に転換できる」〈NHK・知恵泉『土方歳三NO2の生き方』より〉

嫌われ役に徹して組織を強固にした新撰組土方歳三の生き方から、「変わる」ことへの積極性が自分を成長させることを教えてくれた。自分を変えるためには「大変」なことへ挑戦すること。「大変」とは「大きく変われる」ことを意味するという。

2・読書から

◆「よいコーチは技量を上げる人。でも、最高のコーチは心に火をつける人。選手が自発的に取り組むような工夫ができる人ではないでしょうか（鈴木スポーツ庁長官）」〈島沢優子『ブラック部活から子どもを守るには』〉

選手の心に火をつけるには指導者自身の心に火がついていなければならない。しかも真っ赤な炎が。新井先生の言葉を思い出す「まず燃えよ。燃えない焚き火を誰が囲もうか」。

◆「21世紀の予防医学最大の発見は、人とのつながりがなく孤独な状態が、喫煙よりも身体に悪いということ」〈『コーチングクリニック』〉

孫娘は自己第一主義。散歩に出ると誰にでも声をかける。私も真似して今までつきあいのなかった近所の人たちに声をかける。町内会にも顔を出すようになった。母が亡くなったからいつも一人で部屋にいた亡き父を思い出す。もっと話し相手になっていたら・・・。

3・新聞のコラム等から

◆「常に“自分の建物は国際レベルと遜色がないかを考える”と言われていました。」〈朝日新聞・『語る』・建築家・安藤忠雄〉

大学も出ないで独学で建築を学んだ世界的な建築家の言葉である。キャリアは無くとも目指すは超一流。目指しているうちにそうになっていくようである。バスケットボールの子どもたちもこうあってほしい。そして私は伝えていきたい。

◆「野球の素晴らしさが伝わるよう、野球の神様に愛されるように、全力で戦うことをここに誓います」〈朝日新聞・高校野球西東京大会開会式・清宮幸太郎選手宣誓〉

先日のドラフト会議では高校生として史上二人目の7球団1位指名を得た清宮選手。勝負師としての実力のみならず優れた人間性も兼ね備える。言うこともふるっている。